

unicorn の -corn と「とうもろこし」の corn

—「グリムの法則」で楽しむ英語の背景—

酒井 典久

unicorn 「一角獣」の -corn と「とうもろこし」の corn の一致は偶然にすぎないのでしょうか、と問われたとします。unicorn の -corn は、「角」を意味するラテン語の cornu に由来するし、「とうもろこし」の corn は英語本来の語だから両者の一致は単なる偶然にすぎない、という答えが一般的かもしれません。

uni + corn

|| ||

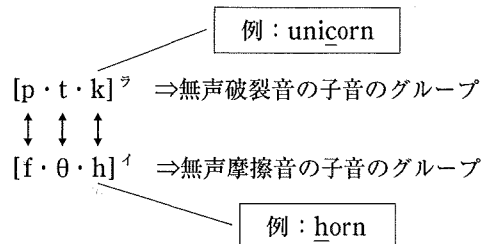
one + horn 「1つの角」

ところが、この両者の一致は単なる偶然ではなく、「グリムの法則」で、実にみごとに説明がつくのです。では、その説明に不可欠な「グリムの法則」とはどのようなものなのかを見ていきましょう（ここでは、英語とラテン語に関係する部分だけを取り上げ、後の研究成果も含め、紹介します）。

「グリムの法則」とは、ご存じの方も多いと思いますが、英語とラテン語の間に存在する子音の対応関係を体系づけた公式のようなものです。グリムとは、あの『グリム童話集』で有名な Jacob Grimm (1785—1863) のことで、彼は民俗学者であっただけでなく偉大な比較言語学者でもあったのです。ここでは、ラテン語に由来するものに^ラを、英語に由来するものに^イを付けて由来を表示します。では、次の各組の c^ラと h^イの対応にご注目ください。

unicorn ^ラ 「角」	cordial ^ラ 「心からの」
↓	↓
horn ^イ 「角」	heart ^イ 「心からの」
canine ^ラ 「犬科の」	cent ^ラ 「(単位として)100」
↓	↓
hound ^イ 「獵犬」	hundred ^イ 「100」
century ^ラ 「cent(100)の ury(まとまり)⇒	
↓ 100年間」	
hundred ^イ 「100」	

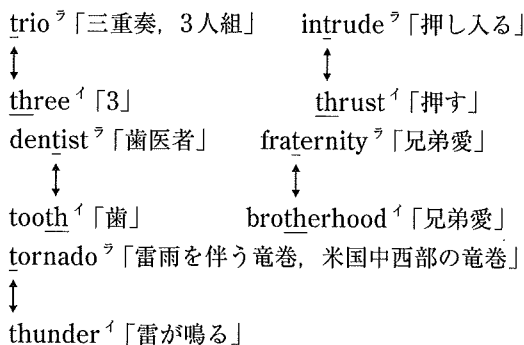
※ century や cent の c- は現在では [s] と発音されますが、ラテン語の時代には [k] と発音されており、このグループに分類することができます。ご覧のように、ラテン語の c[k] が英語ではみごとに h[h] に対応しています ([k^ラ ↔ h^イ])。そして、このような対応は、他にも存在するのです。次の図をご覧ください([]の中は発音記号です)。



この図は、ラテン語の [p] は英語の [f] と、同じくラテン語の [t] は英語の [θ] と、同じくラテン語の [k] は英語の [h] とそれぞれ対応するというを示しています。そして、さきほどの [k^ラ ↔ h^イ] の対応は、この3組の対応の中の1組であったことがおわかりいただけると思います。では、残り2組の対応の主な例を見ていきましょう。まず、[p^ラ ↔ f^イ] の例からです。

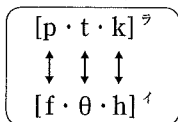
pantry ^ラ 「食料貯蔵室」	primary ^ラ 「最初の」
↓	↓
food ^イ 「食べ物」	first ^イ 「最初の」
prejudice ^ラ 「pre (前もっての) judice (判断) ⇒	
↓ 偏見」	
foretell ^イ 「fore(前もって) tell(言う) ⇒ 予言する」	
pedestrian ^ラ 「pede (足で) strain (行く人) ⇒ 歩	
↓ 行者」	
foot ^イ 「足」	
Pisces ^ラ 「(大文字で)魚座」	port ^ラ 「港」
↓	↓
fish ^イ 「魚」	ford ^イ 「浅瀬」

続いて、[t^ラ ↔ θ^イ] の例です。



※英語の tornado は、ラテン語の tonare 「雷が鳴る」と tornare 「渦巻く」が合わさってできたスペイン語の tornado に由来します。

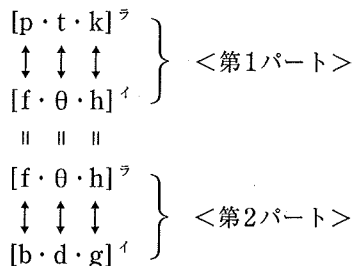
以上が [t^ラ ↔ θ^イ] の主な例でした。これまでにご覧いただいた3組の子音の対応関係を次に再掲してみます。そして、この3組の対応をここでは「グリムの法則」の第1パートと呼ぶことにしましょう。



<「グリムの法則」の第1パート>

実のところ、「グリムの法則」は第3パートまで続きます。最後に「グリムの法則」に隠された秘密が待っていますので、どうかそこまで読み進めていただければと思います。

では、「グリムの法則」の第2パートに移りましょう。第2パートの子音のグループの上段の子音^ラは、興味深いことに先ほどの第1パートの子音のグループの下段の子音 [f · θ · h]^イ と同じになります。ただし、子音は同じ [f · θ · h]^イ でも [f · θ · h]^ラ、すなわちこの子音を持つラテン語に由来する単語で始まる点にご注目ください。第1パートと共に図示してみます。



※ [b · d · g]^イ は有声破裂音のグループ

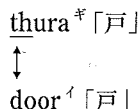
この図の<第2パート>は、ラテン語の [f] は英語の [b] と、[θ] (この音だけは古典ギリシャ語にさかのぼります) は英語の [d] と、ラテン語の [h] は

英語の [g] とそれぞれ対応するということを示しています。では、[f^ラ ↔ b^イ] の具体的な例を見ていきましょう。

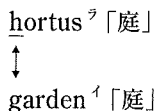


※ found「設立する」は、ラテン語の fundare「基礎を築く」に由来します。

以上が [f^ラ ↔ b^イ] の主な例でした。続いて、[θ^イ ↔ d^イ] の例を1つ。英語の [d] と対応するこの th の音を含む単語はラテン語へと発達していかなかったようです。

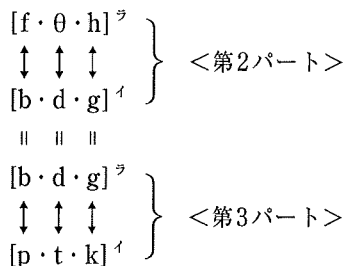


続いて、[h^ラ ↔ g^イ] の例も1つ。英語の [g] と対応するこの h の音を含むラテン語は英語に借用されなかったようです。



以上が「グリムの法則」の第2パートにおける対応の例でした。では、いよいよ第3パートです。

これまでと同様に、第3パートの子音のグループの上段の子音^ラは、第2パートの子音のグループの下段の子音^イ と同じになります。そして、これまで同様、子音は同じ [b · d · g]^イ でも [b · d · g]^ラ、すなわちこの子音を持つラテン語に由来する単語で始まる点にご注目ください。第2パートと共に図示してみます。



※ [p・t・k]¹は無声破裂音のグループ。

この図の<第3パート>は、ラテン語の [b] は英語の [p] と、同じくラテン語の [d] は英語の [t] と、同じくラテン語の [g] は英語の [k] とそれぞれ対応するということを示しています。では [b^ラ↔p^英]¹ の具体的な例を見ていきますが、この例も少ないので1つだけ挙げておきます。

labium^ラ「唇」



lip^英「唇」

続いて、[d^ラ↔t^英]¹の主な例を見ていきましょう。

duet^ラ「二重奏」 edible^ラ「食用の」



two^英「2つ」



eatable^英「食べられる」

※ edible はラテン語の edere
「食べる」に由来します。

record^ラ「re(再び) cord(心に)⇒記録する」



heart^英「心臓、心」

※ record の -cord は、ラテン語の cordis「心臓、心」に由来します。

decade^ラ「deca(10の) de(まとめ)⇒10年」



ten^英「10」

dentist^ラ「歯医者」 doctor^ラ「(教える人)医者」



tooth^英「歯」



teacher^英「教師」

以上が [d^ラ↔t^英]¹の主な例でした。続いて、いよいよ最後の1組の [g^ラ↔k^英]¹の主な例を見ていきましょう。

ignorant^ラ「i(ない) gnorant(知っている)⇒



無知の」

know^英「知っている」

※ know の k- は、昔は発音されていました。また、ignorant の i- は、否定を表す接頭辞で、たとえば impossible の im- の異形です。

grain^ラ「穀物、粒」



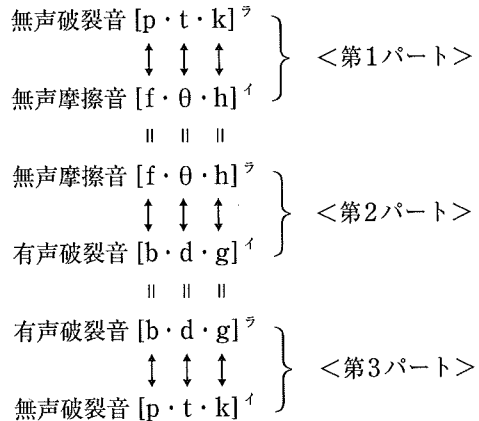
corn^英「穀物、とうもろこし」

※「グリムの法則」は文字でなく音に当てはまりますので、corn の発音記号 [k] を思い浮かべてください。

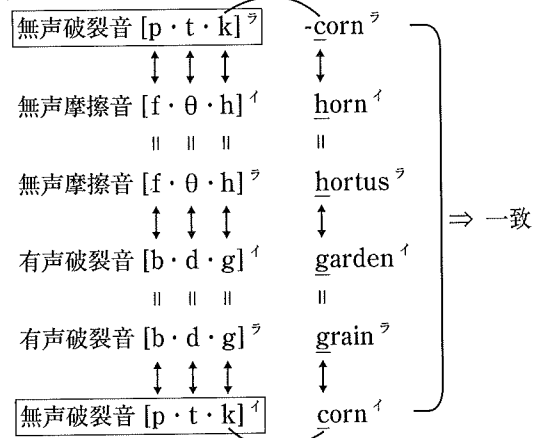
以上、「グリムの法則」の第1パートから第3パー

トまでをご覧ください。この記事は unicorn の -corn^ラ「角」の例で始まり、「とうもろこし」の corn^英で終わったことを頭の片隅に留め、いったん「グリムの法則」の全体像を確認しておきましょう。

次の図をご覧ください。3種類の音から成るラテン語の子音のグループが、同じく3種類の音から成る英語の子音のグループと次々に、しかも整然と対応していくことがおわかりいただけると思います。



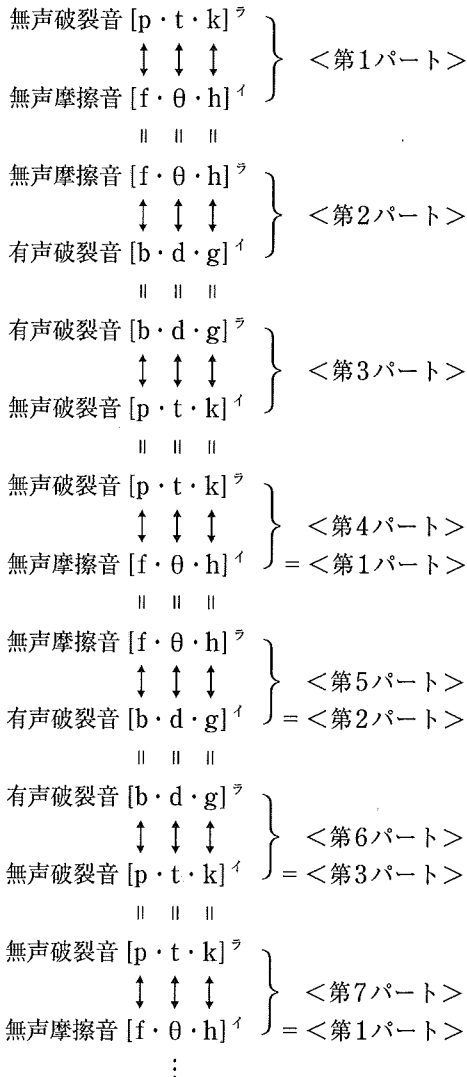
では、このへんで unicorn の -corn^ラと「とうもろこし」の corn^英が一致した理由をご説明したいと思います。次の図で、最初に出発したラテン語の子音のグループ [無声破裂音 [p・t・k]^ラ] と最終的にたどり着いた英語の子音のグループを比較してみてください。



そうなのです。最初に出発した第1パートの上段の子音のグループ [p・t・k]^ラ と最終的に行き着いた第3パートの下段の子音のグループ [p・t・k]^英 がピッタリと一致するのです。両者がラテン語と英語であるにもかかわらず！そして、この両者の一致の

冴えたる例が unicorn の -corn^ラと「とうもろこし」の corn^イだったので、

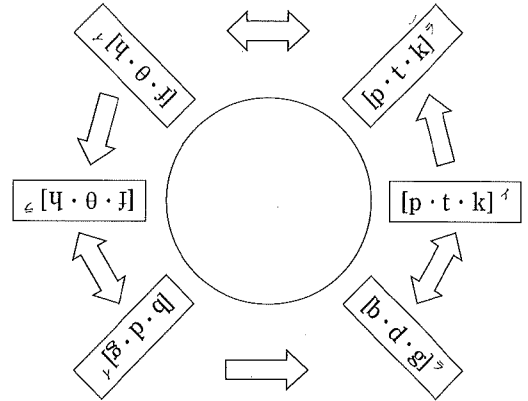
ここで、もう少し考察を深めてみたいと思います。[p・t・k]^ラで始まり、[p・t・k]^イで終わるということは何を意味しているのでしょうか。試しに上の図を第4パート、第5パート…という具合にこれまでと同じ手順で進めていったとしましょう。その際、あるパートから次のパートに移る際、[・・]^イと同じ3種類の子音のグループ[・・]^ラで次のパートを始めるという手順に従ってください。次のようになります。



ご覧のように、「グリムの法則」は第1パートから第3パートまでがどこまでも繰り返されていくことがわかります。実はこのぐるぐると回るように当てはまっていくこと—循環性—こそが、「グリムの法

則」に隠されていた秘密”だったので、

そうなりますと「グリムの法則」は流れ図的に表すのではなく循環図的に表すことができそうです。試しにやってみましょう。風ぐるまとかプロペラなどを思い浮かべながらご覧いただければと思います(⇄はそれぞれが対応することを表します)。



いかがでしょうか。前の図よりはスッキリまとまったのではないのでしょうか。ラテン語と英語のこのような対応は、今から2500年くらい前に、ヨーロッパで大きな民族集団が分離するときに起こったのではないかと推定されています。

現在の私たちは「グリムの法則」を図や公式として確認できますが、当時の人々は言うまでもなく、このような対応を意識することなく個々の子音を単語の一部として日常生活の中でごく自然に使っていました。ブリテン島とローマという距離を隔てながら、

にもかかわらず、このような系統的な対応が現在でもなお見出せるとは、言葉も、そしてそれを使う人間も神秘的な存在であると思わずにはいられません(英語やラテン語のこのような背景に興味をお持ちになった方は、拙書『英語のしくみが見える英文法』(文芸社)を図書館に入れていただければ光栄です)。

参考文献

今里智晃・土家典生(1987)『英語の辞書と語源』大修館書店
 梅田修(1988)『英語の語源物語』大修館書店
 小稲義男編集主幹(1986)『新英和大辞典 第5版』研究社